8 家　庭　科

森 冨　　恵

1.「豊かな感性を育む」家庭科授業のありかた

(1) 個性が生きる家庭科授業

平成元年の文部省の学習指導要領の改訂の方針は，次の4点である。

① 心の教育の充実
② 基礎・基本の重視と個性教育の推進
③ 自己教育力の育成
④ 文化と伝統の尊重と国際理解の推進

また，その改善の基本方針は，

① 家庭を取り巻く環境や社会の変化等に対応すること
② 男女が協力して家庭生活を築いていくこと
③ 生活に必要な知識と技術を修得させること

である。このことは，これまで本校が「個が生きる家庭科授業」において目指してきたところと基本的に同じである。本校では「個が生きる家庭科授業」を，次のように捉えている。

- 一人一人の子ども達が，意欲的に学習のめあてに取り組み，やり遂げたという喜びを感じることができる授業
- 一人一人の子ども達が，自分や友達の考え・発想・よさを認め，さらにそれを自分なりに生かそうとすることができる授業

このような，個が生きる家庭科授業を行うためには，次の4点を必要な条件として考えている。

① 個の実態を把握し，それを指導に生かす。
② 一人一人の考え・発想・よさなど個の存在を認める雰囲気作りをする。
③ 学習のめあてを意欲的に追求させるような題材構成・教材・教具・発問・場の工夫をする。
④ 実践化に向けての評価の場を設定する。

以上のような考えに基づき「個が生きる家庭科授業」では，一人一人の児童が，よりよい家庭生活をめざして生活上の課題を解決したり創意工夫していくこと，つまり実践的な態度を育成していくことを目指している。

(2) 自己を高める評価力の育成

よりよい自分の姿をめざして自己を高める資質を育成していくということは，家庭科においては，よりよい家庭生活をめざして生活上の課題を解決したり，創意工夫したりする実践的な態度を育てていくことだと考える。これは，本校の「個が生きる家庭科授業」を通して目指しているところと同じである。自己を高める資質を育成していくには，自己評価や相互評価を取り入れ，目標に対する達成状況や問題点などを児童自身が把握し，それに対処する方法を考えるように仕向けることが大切である。児童自身が自己評価しながら作業を進めることは，仕事の仕方を学習する方法としても効果的であり，その際，児童相互に評価し合う場を設定すると，自分とは違った作業の方法や進め方を学ぶことが出来たり，誤りに気付くことが出来たりする。このようにして自分で学ぶ力を付

けるために自己評価，相互評価を有効に位置付けたい。その場合は，標本や作品，評価基準の具体例などを多く用意し，的確な自己評価が出来るように工夫する。[1] このような自己を高める評価力の育成には，授業における児童の強いめあての意識の形成が重要であり，そのめあてを追求する活動によって自分がどう変容したのか活動について児童自身が振り返ることの出来る場が必要である。特に，家庭科においては，授業の中でどの様に変容したかにとどまらず,「私は，これからどうしようと思うのか。」実際の家庭生活へつながる意識を形成することも大切である。

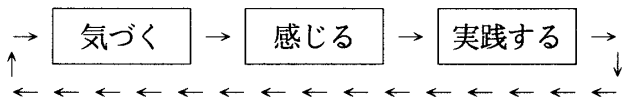
(3) 「感性を育む」家庭科授業とは

① 子どもの家庭生活と感性

個が生きる家庭科授業では，一人一人の児童が，よりよい家庭生活をめざして生活上の課題を解決したり，創意工夫したりする実践的な態度を育てていくことを目指しているが，昔に比べ今の子ども達の生活時間はどのように変わってきているのだろうか。1941年の国民学校５年生の調査と1985年のＮＨＫ世論調査部「国民生活時間調査」による小学校５・６ねんせいの調査結果を比較すると，時間的に大きな変化のみられる項目がある。昔に比べて今の子ども達の生活時間は，家事・用事にかける時間が１時間10分の減少し，活字・テレビにかける時間が約１時間も増えているということである。(家事・用事1941年は１時間31分・1985年は19分，活字・テレビ1941年は27分・1985年は１時間29分）昔の家事・用事は種類も多く，時間もかかった。子どもはこれを手助けしたし，親はこれを積極的に命じもした。ここから「ふれあい」は当然，多く生まれたであろう。現在の日本の社会は「ふれあい」を忘れている。社会に「ふれあい」を回復し，社会や科学に「創造」を引き起こし，なによりも一人一人の人間の心に「やさしさ」や「自己主張」を目ざめさせるためには，人間の感性や情報の完全な働きをもたねばならない。[2] これは，(1)の改訂の方針の１つである心の教育の充実とも重なる。

② 「感性を育む」家庭科授業のあり方

感性とは,「価値あるものに気づく感覚」[2] である。具体的には,「物や事象に何を感じ表現するかということ」であり，さらに問題を追求することと定義される。家庭科において「表現すること」とは，特に実践することとしてとらえ，感性とは,「気づく」「感じる」「実践する」ことと考えた。



このような子ども達の感性を育む家庭科の授業のあり方としては，次のことが大切なポイントであると考える。

① 子どもの発達段階や生活経験など個の実態に合った活動を設定する。

② 子どもに教えこむのではなく，自ら気づき感じることのできる場を設定する。

③ 子どもが伸び伸びと実践することのできる雰囲気作りをする。